

小奈辺陵墓参考地墳塋護岸整備その他工事に伴う立会調査

はじめに

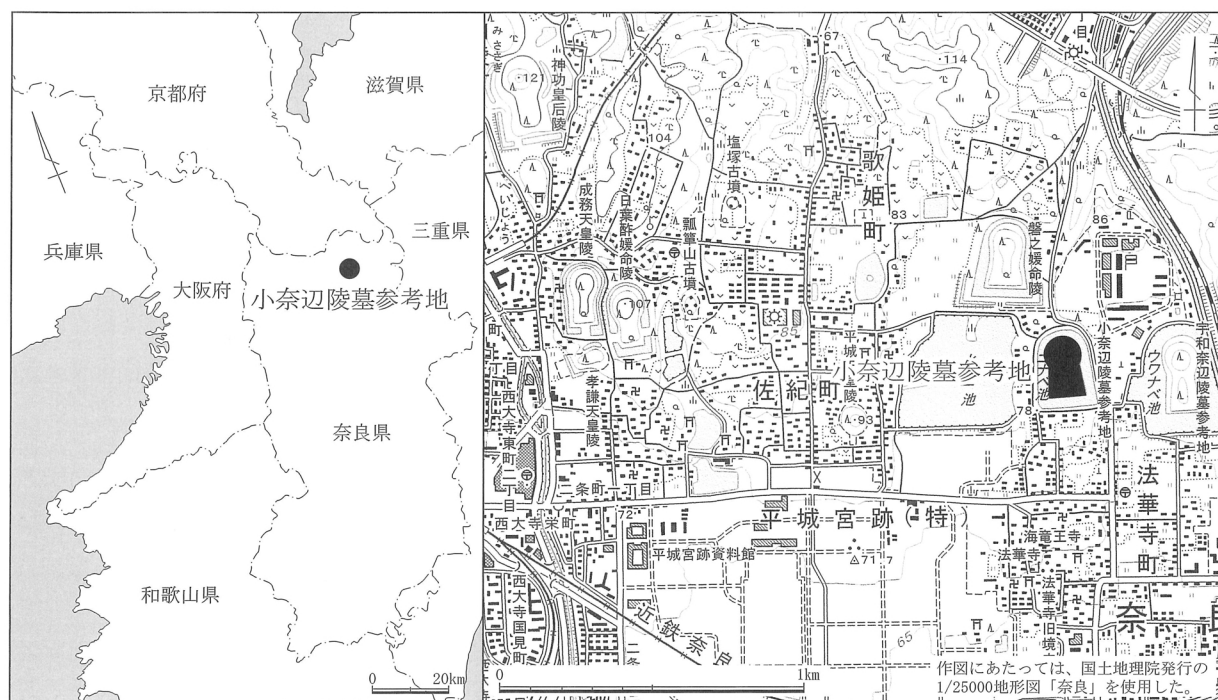
本参考地は、奈良県奈良市法華寺町に所在し、奈良盆地北縁部の平城山丘陵上に前方部を南に向けて築造されている。遺跡名はコナベ古墳であり、全長約 210 m を測る前方後円墳として佐紀古墳群における「東群」の一角を占める（第 30・31 図）。

平成 21 年度には、墳塋護岸整備工事が計画されたことによる事前調査が実施され、その調査結果は本誌第 62 号において報告したところである⁽¹⁾。工事は、事前調査の結果を受けて平成 23 年度に実施されたが、その際の立会調査結果が以下に述べる報告である。調査は、平成 23 年 11 月 21 日～11 月 24 日の間に本部職員と畝傍陵墓監区事務所佐紀部職員により実施して、その他の工事期間中については佐紀部職員が随時立ち会った。

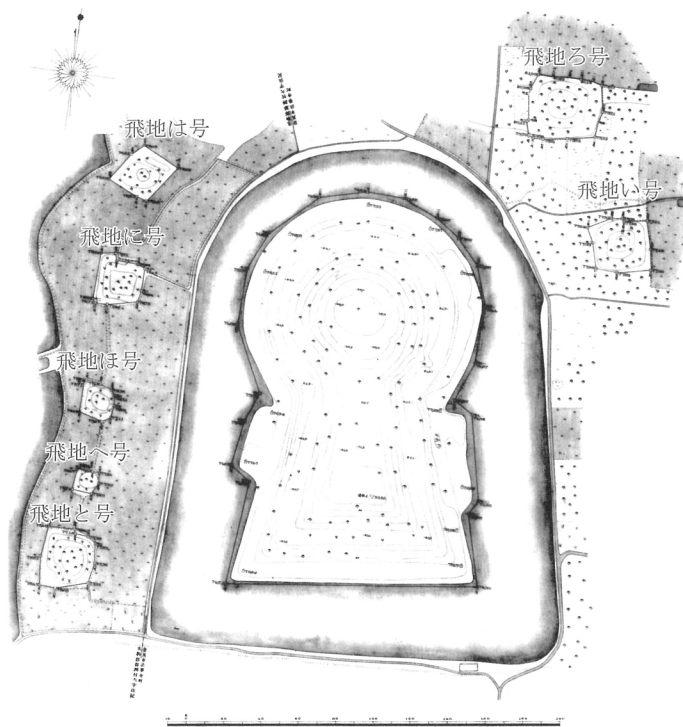
墳丘は事前調査後 2 年間を経過しており、その間も濠水の湛えられた状態が続いたため、墳丘裾部には新たに崩落が認められる箇所もあった。工法検討の結果、掘削を伴う内容ではなかったことから、調査は主として崩落によって新たに転落した埴輪片の採集位置と露出する埴輪列の位置や方向などについて記録をとどめる作業を中心に行った。工事範囲は本参考地の墳丘裾全周に及ぶが、もっとも埴輪片の転落が認められる範囲は東西の造出であった。よって、本部立会調査の期間においては、東西造出周辺を集中的に精査して、埴輪片等はトータルステーションを用いて、位置を記録のうえ採集した。また、後円部と前方部側面、前面については、主として畝傍陵墓監区事務所佐紀部職員が随時立会を行い、埴輪片等が発見された場合は、おおよその位置を記録したうえで取り上げた。

1 調査地の状況

後円部 後円部は、前方部側に比べると地形の上で高くなっているため、濠水は比較的浅いということが出来るが、地山でも混礫土が主体で構成されている範囲では崩落が顕著な状況にあった。しかし、地形的には事前調査時から大きな変化は認められなかった。



第30図 小奈辺陵墓参考地 概略位置図 (1/2,000,000、1/25,000)



第31図 小奈辺陵墓参考地 全体図 (1/4,000)

認められないため、遺構の痕跡と考えられるか否かについての判断は難しい。

一方、西造出（第32図左）は北半部の造出上面に混礫土主体の地山が認められるなど、以前から濠水の影響を受けやすいと考えられたが、実際新たに転落した埴輪片が確認できるなど一部に崩落が見られた。埴輪片は、北西隅と西面中央付近、および南西隅のおおむね3箇所において埴輪片が集中的に採集された。採集箇所上部の崩落面には埴輪列が確認されていることから、その一部が転落したものであろう。

なお、後述するとおり、採集した遺物の大半は埴輪片であるが、その器面の残存状況などをみると、造出周辺の埴輪には良好な状態を保つ破片が少なからず見られたことから、事前調査後に新たに転落したものがあつたと推測される。一方、それ以外の範囲での採集資料は摩滅の顕著な破片で占められており、以前から墳丘裾付近に転落していたものと考えられる。

2 採集遺物

本調査において、後円部で25点、前方部で1点、東造出で125点、西造出において209点の遺物を採集した。一部に土器や摩滅により埴輪か否かの判別が困難な破片を含むが、大半は埴輪片である。後円部と前方部での採集遺物については摩滅した破片であるため、ここでは造出での採集品について提示したい。

なお、挿図内の番号横に付した数字は、第32図内で示した採集位置を示す。

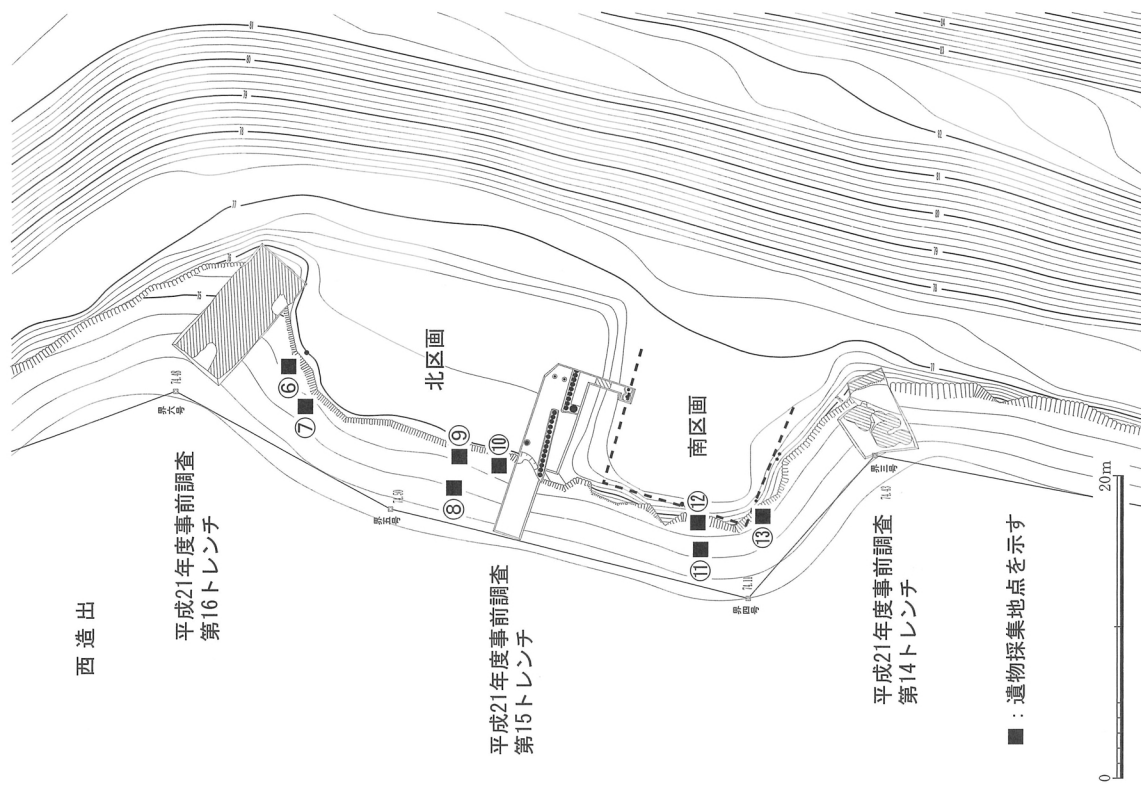
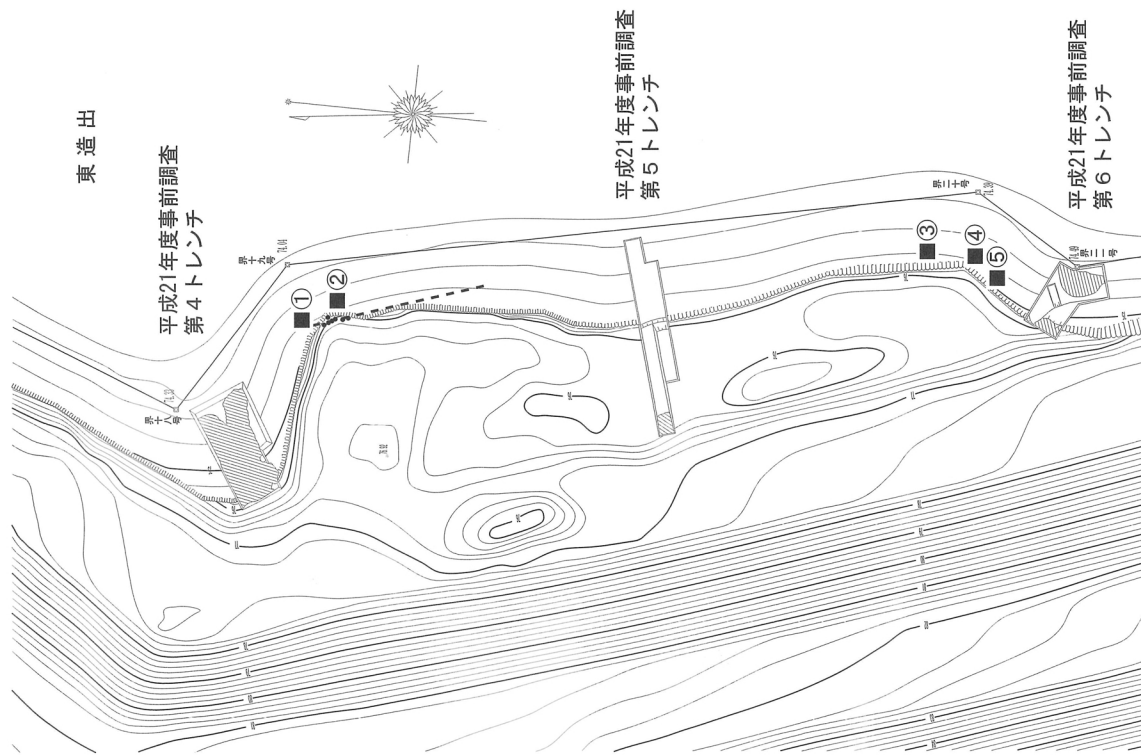
(1) 円筒埴輪・壺形埴輪 (第33図、図版17、18)

円筒埴輪 1～5は、本参考地において樹立されている円筒埴輪の中でも、主体を占めるサイズにあたる個体(底径22cm～25cm)である。1は、東造出の北東隅で確認された埴輪列から落下した底部の破片である。複数個体の破片があると考えられるが、水に浸かる期間が長かったためか、調整痕などは摩滅して失われているものが多く、1のみ図示した。復元底径は約26cm、第1段高は約15cmを測る。外面調整は1次調整タテハケの後、2次調整のヨコハケが施されるがあまり明瞭ではない。

2～5は西造出採集地点⑥・⑦で採集されたものである。採集位置から、西造出の北区画北辺を構成する個体と考えられる。2は3の底部と同一個体の口縁部と考えられる。外面にヘラ描きによる文様が認められるが、全体像は不明である。3は、復元底部径約24cmを測り、第1段突帯までの高さが残存する。第1段

前方部 前方部は、南に面しており濠水のもっとも深い位置にあたるため、墳丘第一段斜面は大きく抉られている状況である。しかし、粘土質の地山であるためか、地形的には事前調査時と比べて目立った変化は認められなかった。

造出 東造出（第32図右）は、比較的粘土質であるためか、地形的には事前調査時と比べて目立った変化は認められなかった。事前調査の時点で既に確認されていたが、北東隅の水涯線に沿ったえぐれの箇所、引き続き底面が露出した状態の埴輪列を南北方向に6個体分確認した。破片の一部は落下した状態にあつたので、落下分について採集した。また、南東隅では家形埴輪の破片と考えられる形象埴輪片を採集している。そのほか、事前調査の第5トレンチから南約10m付近に人頭大の石が集中する箇所が認められた。葦石の残骸のようにも見えるが、周辺に石材が



第32図 小奈辺陵墓参考地 埴輪採集箇所及び埴輪列確認箇所 (1/500)

高は約 16 cm であるが、突帯は剥離している。突帯間隔設定には凹線を用いている。1 次調整のタテハケの後 2 次調整でヨコハケを施すが、ヨコハケは全面に及ばない。底部内面にヘラケズリが認められる。同様の特徴をもつ個体は、事前調査の第 10 トレンチで出土している（本誌第 62 号第 20 図 12）。2・3 と同一個体と考えられる破片は他にも採集されているが接合関係にあるものは少ない。

4 は復元底部径約 22 cm を測り、第 1 段突帯までの高さが残存する。第 1 段高は約 15.5 cm である。同一個体と考えられる破片は他にも採集されているが接合関係にあるものは少ない。第 1 段の外表面は 1 次調整タテハケの後、2 次調整ヨコハケが施される。ヨコハケは明瞭な工具の静止痕が見られない。

5 は、底部の一部が残るのみである。外表面は 1 次調整としてタテハケ・ナナメハケの後、2 次調整として外表面全体を丁寧に覆うようにヨコハケが施されている。

6～9 は、採集地点から西造出南区画の埴輪列に使用されたものと考えられる。事前調査と合わせた一連の調査範囲内では、この区画の埴輪列に相対的に小形の円筒埴輪が使用されている（底径 20 cm 程度）。8・9 のように器壁の薄い個体が含まれる。6 は、採集位置やハケメの特徴から 8 の口縁部と考えられる。7 は採集地点㊸から採集されたものである。採集地点㊹からも比較的大形の破片が採集されているが、形態や調整の特徴などから同一個体と考えられる。第 1 段突帯付近が残存する。外表面はタテハケの後ヨコハケを施しており、静止痕間隔は比較的広い。8 は、底径がはっきりしないが第 1 段高は約 13.5 cm であり、やはり小形の円筒のようである。外表面調整は第 1 段に 2 次調整のヨコハケはみられないようである。9 は底部の小破片である。器壁が特に薄い。底部ぎりぎりまでヨコハケが施されている。

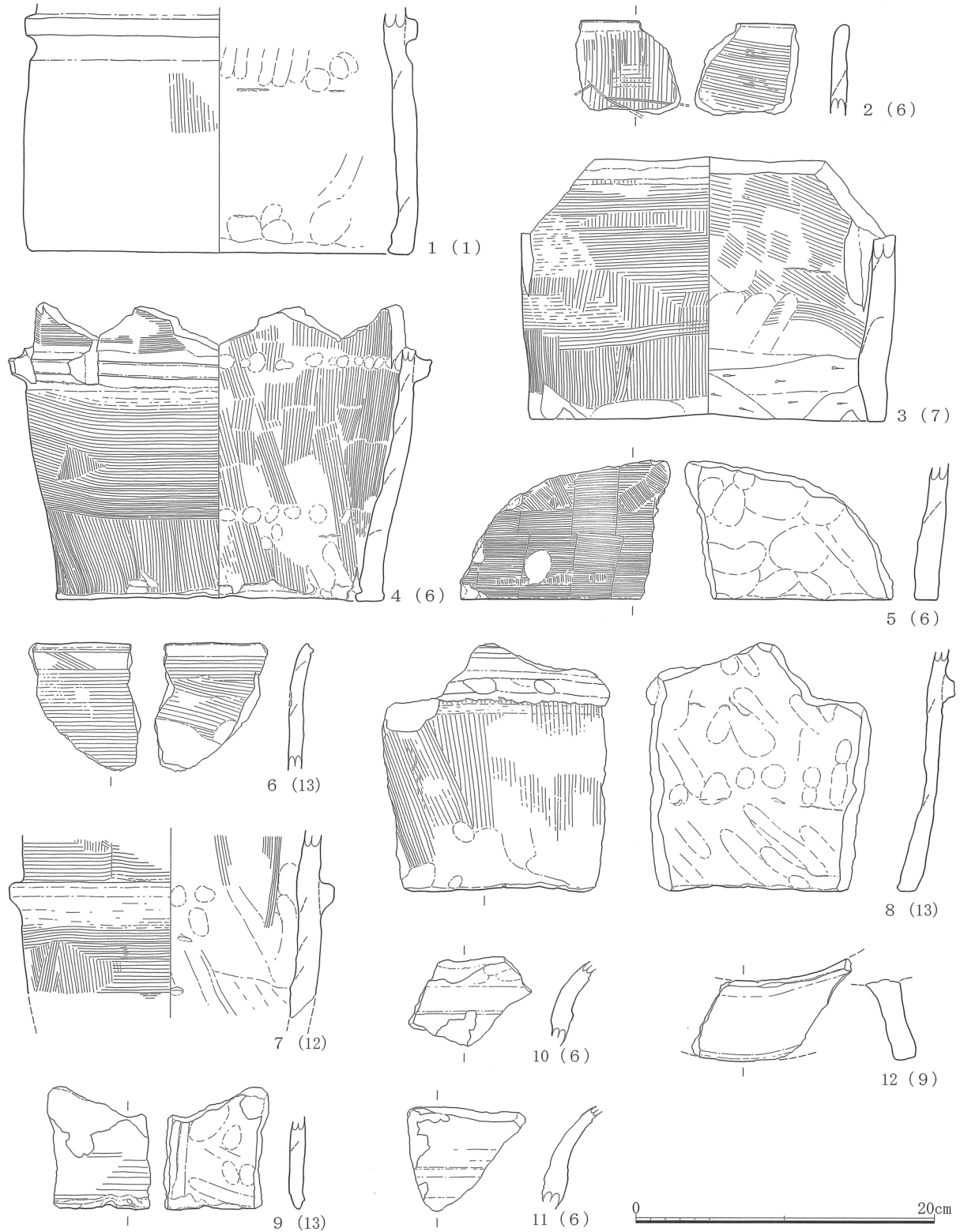
壺形埴輪 10・11 は、西造出採集地点㊺で採集した。採集地点が同じであり、同一個体のほぼ同じ部位の破片と考えられる。内湾する下半部からわずかな段を境に上半部は大きく外反する形態を示す。横方向に比較的丁寧な指ナデを施している。本誌第 62 号第 27 図 55 に挙げたような、壺形埴輪の口縁部の可能性があろう。12 は西造出採集地点㊻で採集した壺形埴輪の鏝部である。

（2）形象埴輪（第 34 図、図版 18）

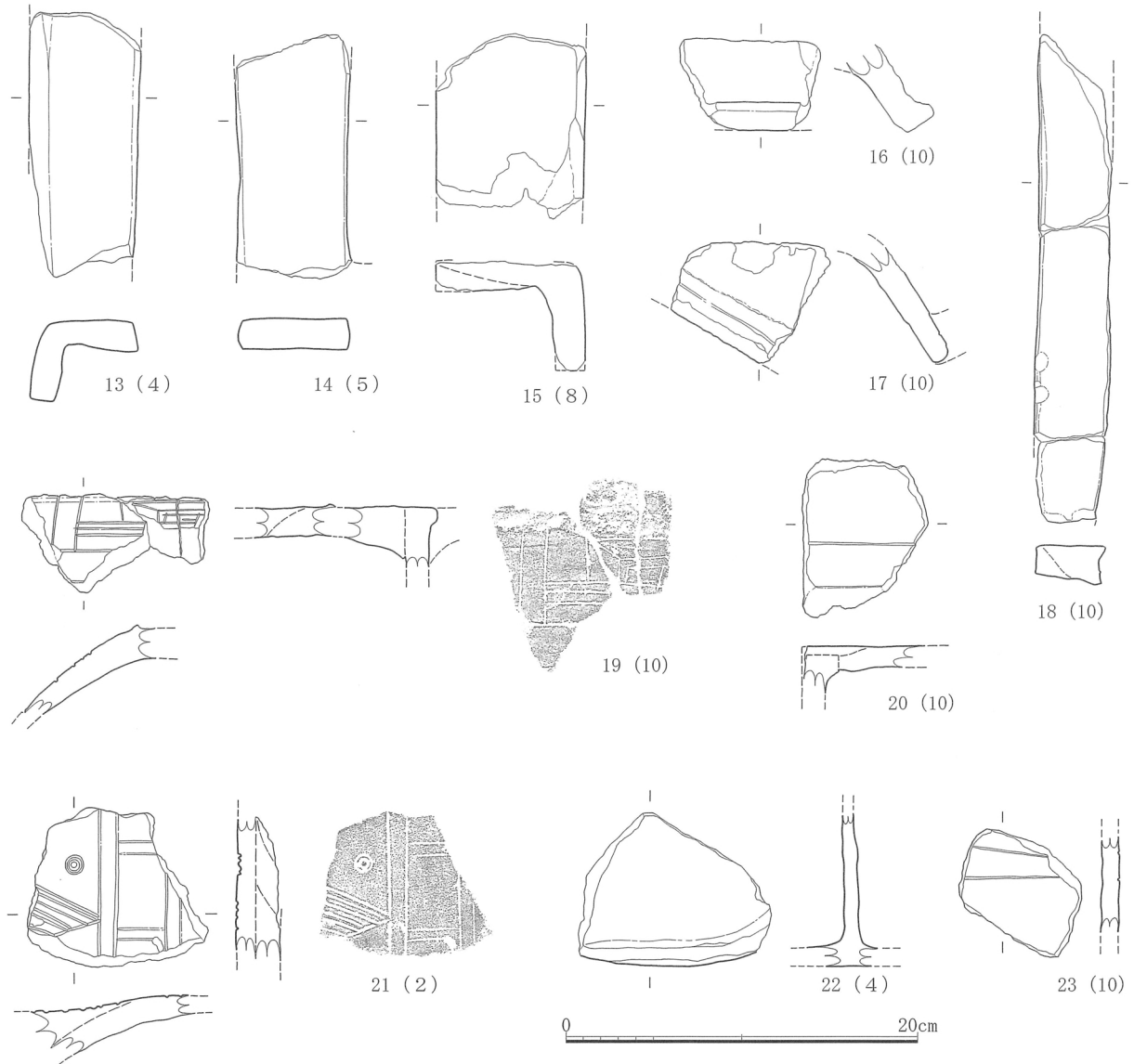
家形埴輪 13 は東造出採集地点㊼で、14 は同㊽で採集した。両地点は近接していることから、両者は同一個体の可能性が高い。いずれも壁や柱の部位にあたり、13 はコーナー部分である。また、14 は右下端付近に屈曲が認められるので、入口付近の破片である可能性が高い。開放的な構造をもつ比較的大形の建物を想定できようか。15 は、西造出採集地点㊾で、16～19 は西造出採集地点㊿で採集した。採集地点㊿では集中的に採集されたので、同一個体の可能性がある。両採集地点は近接しており、事前調査の第 15 トレンチ設定箇所付近である。15 は、壁のコーナー部分にあたる。13・14 と同様に、開放的な構造を持つ比較的大形の建物を想定できる。16～19 は屋根の破片である。16 は軒先の破片である。17 は切妻部分の棟付近にあたると思われる。端部を擬口縁として破風板を接合していたようである。接合面には沈線が施されている。18 は一見すると裾廻突帯とも考えられるが、接合面の粘土の張り出しや沈線の圧痕などから、破風板と考えられる。19 は棟部分で、部位は異なるものの、岐阜県昼飯大塚古墳の家形埴輪にも同様の文様が線刻により施される。本誌第 62 号第 29 図 67 の個体にも類似の線刻が認められる。また、縦断面をみると、この文様部分で棟に直交する粘土板があり、これを境に左側はその粘土板に屋根を形成する粘土が貼り付けられている。一方、図上右側は粘土が剥離しているため文様が途切れている。このことから、この個体は屋根の途中に仕切り板をもつ構造である可能性が高い。また、頂部には剥離痕があるため、飾り板などが貼り付けられていたと考えられる。20 は、壁の破片でコーナー部分である。横方向に 2 本の線刻があり、本誌第 62 号第 29 図 69 に挙げた個体のように、閉鎖的構造をもつ建物である可能性が高い。19 と 20 には赤色顔料が塗布されている。また、16～19 の屋根と同一個体である可能性が高い。

盾形埴輪 21 は盾形埴輪の盾面である。東造出採集地点㊿で採集した。円筒部の左右に粘土板を貼り付け、中央部は円筒部外表面をそのまま盾面とするタイプである。盾面と円筒部の接合部付近に 2 本 1 単位として梯子状の線刻を施して、外側に斜線で埋めた鋸歯文を描く。鋸歯文の間には二重の同心円文がスタンプにより刻印されている。

器種不明形象埴輪 22は東造出採集地点④付近で採集した。摩滅が激しく全容が不明であるが、図示したように残存する断面で、天地が逆のT字状に粘土板を接合している。接合部の図上右側が斜め上方に上がっていることから、蓋形埴輪の立飾りの破片である可能性が考えられる。23は西造出採集地点⑩で家形埴輪の破片とともに採集された。片方が狭まる2本の沈線が認められる。積極的に家形と考えることは難しく、家形の破片としても、器壁の厚みや線刻の特徴などから、20などは別個体と考えられる。



第33図 小奈辺陵墓参考地 採集品実測図 (1) 円筒埴輪・壺形埴輪 (1/4)



第34図 小奈辺陵墓参考地 採集品実測図(2) 形象埴輪(1/4)

3 造出上の埴輪列による区画について

区画の規模について 造出や埴輪列の構造についての概要は、本誌第62号において報告を行ったところである。以下に、第62号での記述も踏まえつつ、造出に樹立された埴輪列による区画の規模について述べたい(第32図)。

東造出は、事前調査の時点で確認されていた北東隅に残る南北方向の埴輪列から、区画があったことは確かである。埴輪列はその位置から区画のコーナーに近いものと思われる。しかし、第5トレンチの調査結果と北東隅の埴輪列の位置から、東側(濠側)については既に失われており、西側(墳丘側)では確認されなかった。このことにより、北東隅の埴輪列を含む区画は、少なくとも第5トレンチより南側には広がっていないと考えられる。東造出は南北の長さが墳丘との接合部で約58mまで復元が可能であるが、同じ基準で長さ約42mに復元され、やや小さくなる西造出でも2つの区画があることから、東造出でも複数の区画が作られていた可能性は否定できないといえよう。

西造出では、事前調査の時点でも複数箇所で埴輪列の露出が確認されていた。幸い新たな露出箇所は確認されなかったが、これまで知られた露出箇所において確認出来る埴輪の個体数には若干の増加が認められ

た。これらをもとに埴輪列による区画の規模を示せば、北区画で南北約 17 m になる。東西方向は両辺とも確認できていないため、規模は不明と言わざるを得ないが、東側は第 1 段斜面で画されるためおおよその位置は推定可能である。この状況で東西で同じ 17 m を想定すると濠側に相当出てしまうため、東西の規模は南北より小さい可能性が高い。よって、北区画の平面は南北に長い長方形である可能性を推定できる。

南区画では、北、南、西辺で埴輪列を確認している。その規模は南北で約 11 m を測る。東西は、西辺のみであり、東辺は墳丘第 1 段テラス面と一連のため、地形的に画される位置が推定しづらい。しかし、事前調査により、第 1 段テラス面上における埴輪列の樹立が確認されているため、第 1 段テラス面にまで食い込む規模となる可能性は低いと考えられよう。さらに、南区画で使用される埴輪は、他の墳丘テラス面や造出で使用される埴輪と比較して小形品が使用されている。このことから、樹立面は一連であるものの、第 1 段テラス面の埴輪列とは別の区画であった可能性が高いと考えられ、この推定によれば、南区画の東西規模は南北とほぼ同じと考えられる。よって、南区画の平面は、ほぼ正方形である可能性も推測できる⁽²⁾。

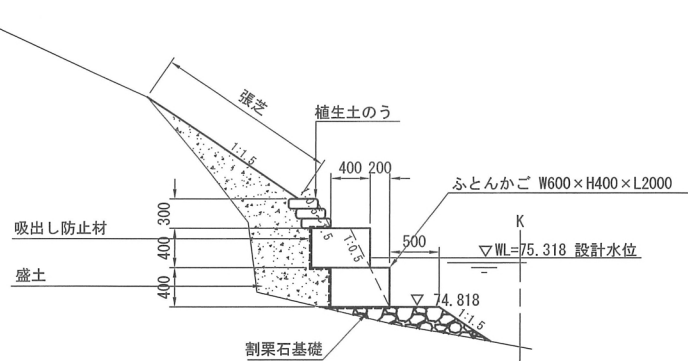
形象埴輪の採集位置について 形象埴輪の破片は、東造出で採集地点②・④・⑤から、西造出で採集地点⑧～⑩から採集されている。東造出は、北東隅以外で埴輪列が確認されていないが、家形埴輪は南東隅付近の④・⑤で集中的に採集されており、東造出では南東隅付近に家形埴輪が配列されていた可能性が高い。また、北東隅の②付近には盾形埴輪が配列された可能性があるが、小片が 1 点だけであるので配列位置の判断は保留せざるを得ない。一方、西造出では、第 15 トレンチの調査から北区画の南東隅付近に家形埴輪の樹立が確認されたが、今回の採集位置は濠側となっている。このことから、少なくとも北区画の南辺両端にあたる付近にそれぞれ家形埴輪が配列されていた可能性の高いことを示すものであろう。また、採集地点⑧からも家形埴輪の破片が採集された。北辺においても南辺と同様に家形埴輪の配列のあったことが推定される。以上のことから、形象埴輪の採集位置は、本来の埴輪の配列をおおむね反映していると考えておきたい。

まとめ

調査 東西の造出を中心に転落した埴輪片を、その位置を記録しつつ採集した。各埴輪片の特徴と採集位置の関係性は事前調査で確認されたものと同じであり、その成果を追認できた。具体的には、造出近辺で形象埴輪が多く採集された点、大半の円筒埴輪はほぼ同じサイズを占める中、西造出の南半部(南区画)周辺でのみ比較的小形の円筒埴輪片が採集された点などである。また、造出では埴輪列の一部が露出していたため、それらの位置を記録した。特に西造出の南区画では事前調査と合わせて 3 辺で埴輪列を確認できたことにより、区画の平面形とおおよその規模を推定することができた。

なお、形象埴輪として採集品ではあるものの、事前調査では確認されていなかった盾形埴輪が新たに確認された。

工事 護岸工事にあたって掘削は行っていない。工法は、基礎工、かご工、植生工から成り、割栗石敷きの上に、濠水の深さに応じて布団籠を 1 段～3 段積みとしている。石材は、葺石とは異なる奈良県大淀町芦原産のものを使用した。布団籠裏側と布団籠上面から墳丘までの法面には礫質土による盛土を行い、その表面には下方に植生土のうを設置して、上方に野芝による張芝を行っている(第 35 図)。(清喜裕二)



第35図 小奈辺陵墓参考地 工事断面図 (1/80)

註

- (1) 清喜裕二、有馬 伸、加藤一郎 2011「小奈辺陵墓参考地 墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部。
- (2) 南区画の南辺は、現状で確認できる埴輪を線で結ぶ限り正方形にはならず、前方部側面に向かって広がる形となる。造出の平面形態が台形であれば、その形に沿って配列されていると考えられるが、埴輪は崩落しかけている斜面で確認されるために、少なからず動いていると考えられる。本来の平坦面の縁辺は既に失われているため、本来の位置関係を示すのか、造出斜面の崩落による移動によるものかの判断は保留せざるを得ない。



1 東造出 遠景〔北半部〕(東から)



2 東造出 遠景〔南半部〕(東から)



3 西造出 遠景(西から)



4 布団籠設置状況



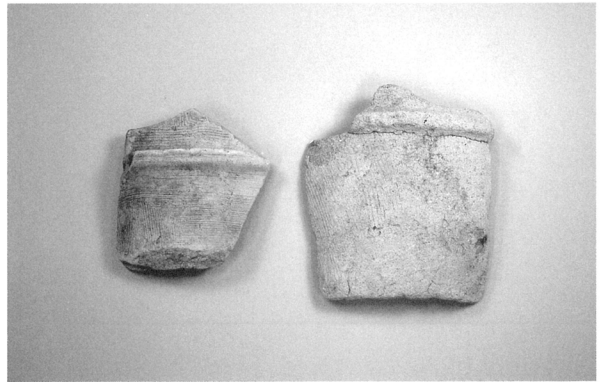
5 西造出採集 円筒埴輪 3



6 西造出採集 円筒埴輪 4



7 西造出採集 円筒埴輪 2・5・6



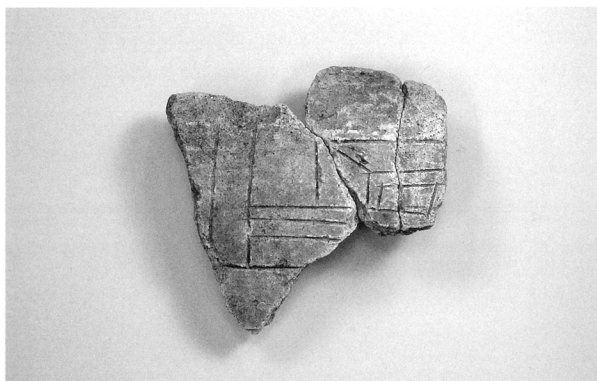
8 西造出採集 円筒埴輪 7・8



1 西造出採集 壺形埴輪 10・11・12



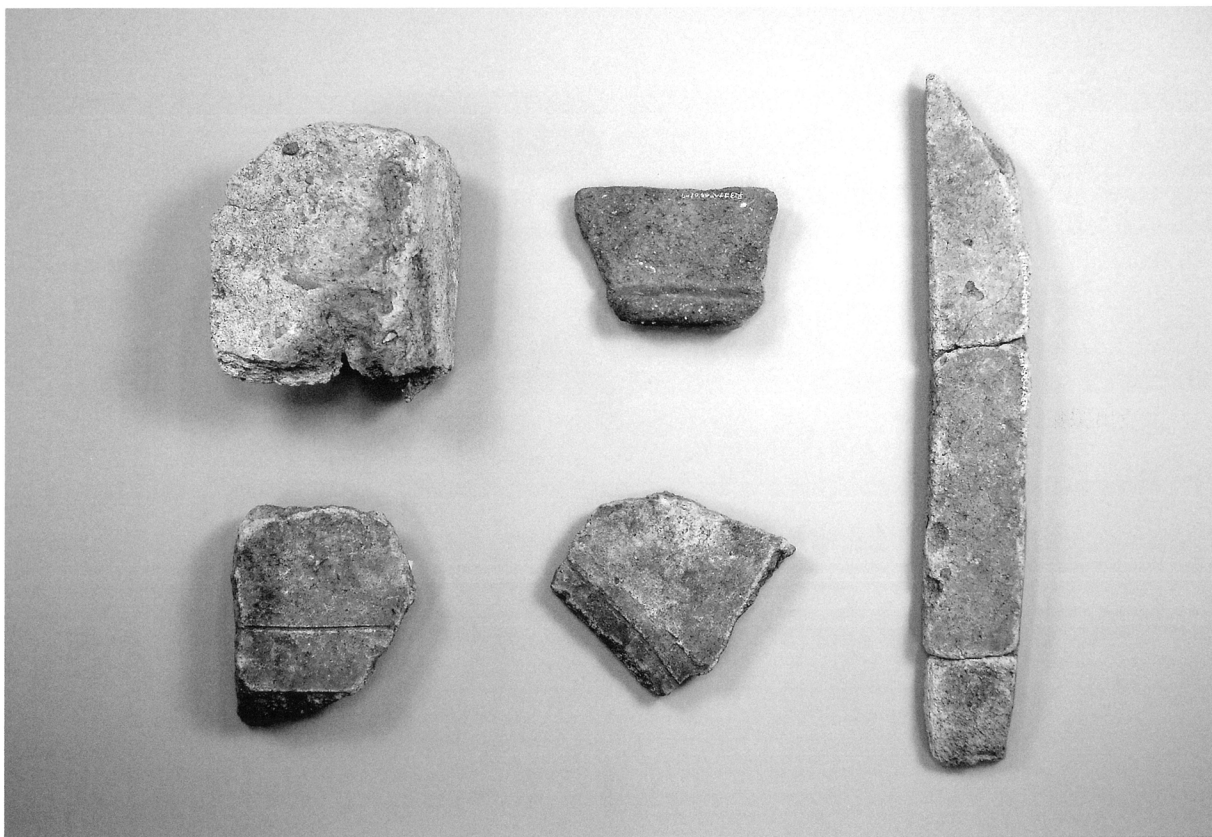
2 東造出採集 盾形埴輪 21



3 西造出採集 家形埴輪 19 (外面)



4 西造出採集 家形埴輪 19 (内面)



5 西造出採集 家形埴輪 15・16・17・18・20